

“没有”と“ニエツト”

● 放眼日中 ●



今年上海留学からちょうど30年、あの頃の中国を思い出す機会が何となく増えてきているのは、年齢のせいだろうか。3月初めに北京へ行くと、両会（全国人民代表大会および政治協商会議）開催中で、街が少しピリピリしていた。今回はシベリア鉄道に初めて乗るためにやって来たのだが、北京駅で切符を買おうとすると窓口から聞こえてきたのは「没有^{メイヨウ}」（ない）の一言。

30年前、現在のように発展していなかった中国各地を旅行した。まず、上海で目的地までの切符を手に入れ、列車で現地に到着すると、そこで長い列に並んで再び次の目的地までの切符を買おうとするのだが、第一声はいつも「没有」だった。悪戦苦闘の後、ようやく3日後の切符を確保すれば、今度は3日間の宿泊先を探すのだが、ここでもほぼ確実に「没

有」がやって来て、そこから長い交渉、戦いが始まる。まるで、決められた台本に沿って事が運ばれていたようだった。実際、切符が買えず目的地を変更したり、宿が取れず野宿したり、人民解放軍宿舎とは知らずに泊まってしまい、翌朝青くなっただけでもあった。

30年たってもやはり「没有」か、と思っていると、窓口の係員は「国際飯店へ行けば買えるかも」と教えてくれた。この辺は、議論の余地がなかった。昔とはだいぶ違ってきている。ところが、その国際飯店まで寒い中歩いて行くと、何と「両会中は閉鎖」されていた。両会開催前後、長安街のホテルは要人宿泊のため閉鎖。これも数年前の駐在経験で知っていた。これでも数年前の駐在経験で知っていたが、結構ショックだった。それでも電話すると、旅行会社のおじさんが切符を持って門まで現れた。

これが今の中国だろう。そして長い長いシベリア鉄道の旅を終え、モスクワから別の都市へ移動しようとして切符売り場へ行くと、窓口の若い女性が厳しい声で「ニエツト」（ない）と言うではないか。どう聞いても「没有」とダブるその響き。しかも、ロシア語が全く分からない東洋人には何とも交渉のしようもない、容赦のない言葉に聞こえた。別の場所ではちゃんと切符は買えたので、何かの勘違いか。

シベリア鉄道に乗っている間、気が付いたことの一つは、中国人は他に良い席が空いていれば、座席指定でも自分の好きなように席を移動していくが、ロシア人はあまりそれを好まないらしい。そして、車掌の対応は中国もよくはないが、ロシアの方がより管理している感じが強かった。乗客は寝具をきちんとして自分で整理して車掌に返している。切符のチェックで「ハラショー」と言われると、「オマエ、よし！」と言われているような感じになり、何だか1980年代の中国を思い出し、また、

同じ社会主義の道を歩んできたロシアと中国。今でも社会主義を看板にしている中国にはかなりの柔軟性が出てきているが、ロシアには管理社会が随所に残っている印象が拭えない。

ただ、ロシアも以前は難しかった自由旅行が可能になり、また、モスクワ・サンクトペテルブルク間の高速鉄道に乗り込むと、車内「WiFi（ワイファイ）」はフリー、車掌も穏やかで英語も通じる。今や両国とも、没有でもニエツトでも、何とかなる時代になっていることを改めて実感する旅となった。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。